

オリンピックの空手日本代表決定後の強化・運営策について
— 所属チームの強化参画により復活した日本柔道をモデルとして —

トップスポーツマネジメントコース
5019A314-7 松下尚道

研究指導教員 平田 竹男 教授

1. 研究の背景

2020年東京オリンピックで空手は正式種目となった。筆者は(公財)全日本空手道連盟ナショナルチームにおいて強化プランニングディレクターの役職を拝命し、日本の勝利に向け強化の課題解決を担当している。空手界にとってオリンピックは初めての経験で、代表決定後の残された日程の中、どのような強化体制を組み、運営していくかは大きな課題である。

日本の空手は、2018年11月にマドリードで開催された第25回世界空手道選手権大会において、世界1のメダル獲得数を達成したが、東京オリンピックでの全8種目金メダル獲得という目標から作成されたマイルストーンに及ばず、大会の結果は「惨敗」と結論付けられた。空手は個人種目であり、球技の代表チームと異なりナショナルチームと所属チームの強化内容の切り分けや連携が難しい。オリンピック直前の両者の有機的関係が2020年東京オリンピックでの成功の鍵となる。

同じ個人種目の柔道は、2012年のロンドンオリンピックで惨敗したとされるが、4年後の2016年リオオリンピックでは過去最高の成績を達成した。柔道のリオ大会に向けた強化体制がどのようなものであったか、また、それがどのように空手に応用可能なかを検討することは、空手にとって有用である。

鈴木・平田(2018)は、ロシア柔道連盟の強化への取り組みを明らかにした。植田(2018)や東野(2011)らは、チーム競技におけるブラジルやアルゼンチンの強化策について明らかにした。しかし空手のオリンピックに向けた強化策や具体的取り組みについて参考となる情報は十分ではない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、オリンピックの空手日本代表決定後、ナショナルチームが所属チームとの連携を効果的に進めるための具体的な方策を明らかにすることである。

3. 研究方法

空手の強化策と、柔道の強化策について関係者にヒアリング調査を実施した。オリンピック直前期の強化・運営策と、それを実行するための組織体制についての相違点を整理し、空手のオリンピックナショナルチームの取り組むべきことを検討する。

4. 結果

1) 代表決定後のナショナルチームの強化・運営策

(1) ナショナルチームの編成

①1コーチあたり、複数人担当する編成：空手の1979～2018年と柔道は2012年ロンドンオリンピックに向けた体制で2008年から採用していた(図1)。

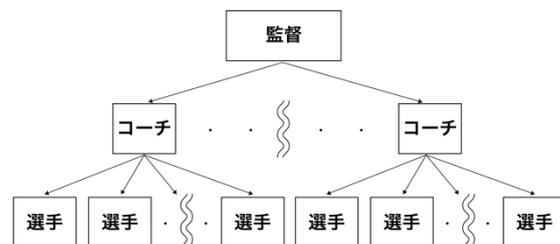


図1 複数担当制

②コーチと選手が1対1の編成：空手は2019年1月から担当コーチ制を開始、柔道は2008年までと、2013年以降、現在までつづく編成である。2016年リオ大会ではこの体制で成果を上げている。

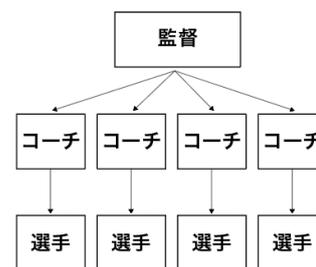


図2 1対1担当制

(2) 柔道の所属チームとナショナルチームの関係

2013年からのナショナルチームは、担当コーチ制を復活させるとともに、所属連携フォーラムや三者面談(選手、ナショナルチームコーチ、所属チームのコーチ)、スーパーアドバイザー制度をスタートさせた。具体的には、所属連携フォーラムで強化選手の所属を集めて、様々な強化スタッフから国際大会の審判情報や技術的な情報、日本としての戦略などを参加者と共有した。リオ大会代表決定後の4月以降に開催された所属連携フォーラムでは、さらに踏み込んだ強化方針やオリンピックに向けた戦略部分が情報担当から発表された。これでチーム全体の課題が所属長に共有され、その後に行われる三者面談にて、フォーラムで得た知見を元に、個人選手にフォーカスしたオリンピックまでの計画が具体的に練られていくという流れとなった。また、スーパーアドバイザーには、選手の特性により、所属チームのコーチだけでなく、中高時代のコーチなど

が参画するケースもあった。

この体制について、2015年世界選手権後のインタビューで井上康生監督は「所属の先生方のご理解と、全日本に携わっているコーチ、スタッフの熱意が良い形でマッチし、結果となって出ていると思っています。」と答えていた

表1 柔道（2012年ロンドン・2013年以降）と空手（2018年世界選手権）の直前強化体制の比較

	柔道		空手
	2012年	2013年以降	2018年
強化連携フォーラム	×	3回	×
三者面談	×	○	×
スーパーアドバイザー	×	○	×
担当コーチ	×	○	×
強化副委員長	2人	3人	1人

(3) 直前合宿

直前120日の内、ナショナルチームでのトレーニングを男子は50日、女子は25日行い、それ以外は所属チームでの活動に委ねられていた。

2) 強化委員会

(1) **空手**：メンバーは技術スタッフ（技術指導を行う）と、医科学スタッフ（トレーナーや情報分析）で構成されていた。2018年はこのメンバーで、2回の強化委員会が開催されていた。

(2) **柔道**：強化委員長1人と副委員長が3人、副委員長以下は強化委員、特別委員、強化スタッフとなっていた。強化委員には科学研究部の代表や、中体連、高体連、学連と言った競技団体の長、元強化スタッフが参画していた。副委員長3人の役割分担は委員長補佐、男子強化部長、女子強化部長。特別委員には、指導者養成委員会、大会事業委員会、国際委員会、審判委員会の長、スポットで指導を行う特別コーチがいた。このメンバーが2016年は男子6回、女子6回、合同6回の強化委員会を開催し、強化方針や選考方法などを話し合っていた。

5. 考察

1) ナショナルチームと所属チームの連携について

柔道ではオリンピックに向け、合宿計画や大会派遣計画、課題克服計画などの強化計画を立案し、ナショナルチームと選手で共有、その上で所属チームのコーチとも共有し、3者同じ方針で強化に取り組んでいた。この共有の過程が強化計画に位置づけられて実施している。

そもそも、柔道の強化委員会は、技術スタッフに加え、実業団などの競技団体、科学研究部、指導者養成委員会、大会事業委員会、国際委員会、審判委員会のそれぞれのトップで構成されていた。このことにより、例えば、国際的な柔道運営の情報や国際ルール最新の最新情報などが技術スタッフにも共有され、また技術スタッフの思惑も競技団体や各種委員会に伝えることができる仕組みとなっていた。

選手の育成母体である所属が参画している競技

団体や、各種委員会に強化委員会の情報や強化方針を公式に伝えたことで、ナショナルチームと所属とがスムーズに同じベクトルを向くことができる。

東野、植田らが明らかにした海外のバレーやバスケットボールと同様に、個人種目である空手においても所属や競技団体、ナショナルチームが世界へ向けベクトルを合わせる事が重要だと考える。

2) 直前120日の強化連携について

直前期に実施すべき事業は、強化連携フォーラム、三者面談、ナショナルチーム合宿、所属練習などである。これらを有機的に連携するための組織体制としては副委員長、担当コーチが所属とナショナルチームの潤滑油となる事が重要だと考えられる。風通しの良い関係性を作り、強化連携の事業を通して共通課題を認識した所属とナショナルチームであれば、お互いの担当を明確にできる。ナショナルチームの役割とは、実業団や強豪大学などの選手を集めた強化合宿を実行し、代表選手に多様な対人経験を獲得させたり、海外ライバル選手の対策や国際大会の情報共有により戦術を補うことである。安心して所属の練習を所属に任せることができれば、例えば、女子は直前の全体合宿をなくして所属で仕上げ、移動や普段と異なる環境によるストレスを極力排除することができる。

6. 結論

オリンピック代表選手の直前強化において、所属チームの指導を最大限活かしつつ、代表チームのスタッフにより抽出された課題をクリアする事が必要となる。

空手では過去のナショナルチーム強化においては、様々な強化体制の変革があった。しかし代表チームの指導と所属チームの指導との効果的連携は見られないままであった。

筆者としては、所属チームの強化参画により復活した柔道代表チームの経験を踏まえ、オリンピックを直前に控えた空手オリンピックナショナルチームには、以下のポイントが重要になると考える。

1. オリンピックに向け、合宿計画や大会派遣計画、課題克服計画などの強化計画の立案。
2. ナショナルチームと選手とで共有した強化計画の所属チームコーチとの共有。
3. オリンピック直前における所属チームコーチとのオリンピックスケジュールなどの詳細な共有。
4. 大会や強化合宿中、所属チームコーチをスーパーアドバイザーとして招聘し、練習や試合の共有。
5. ナショナルチームと所属チームの調整担当ポストの創設。

柔道において、男子はナショナルチームでのトレーニング期間を長く、女子は所属チームでのトレーニング期間を長くするという、直前期間の使い方も参考の一つになる。

また、選手が極めて若く不安定さが見られる場合には、中高時代のコーチを参画させることも一策である。